

閉会の辞

終戦81年となる本日、日比両国の皆様と共に、この地において慰霊祭を執り行うことができました。私事で恐縮ですが、私にとっては任期中三度目、最後のカリラヤ慰霊祭となります。御多用の中、御参列を賜りました全ての皆様に、心より御礼申し上げます。特に、昨年についてフィリピンの皆様の御臨席を得られたことは、両国の絆の深さを改めて示すものであり、誠に感謝に堪えません。

先の大戦において、ここフィリピンの地では、日本人50万人、フィリピン人100万人を超える、おびただしい数の命が失われました。碑の前

に静かに立つ今、祖国に残した家族の顔を胸に抱きながら、熾烈（しれつ）な戦火の中で傷つき、飢えと病に斃（たお）れ、ついに祖国の土を踏むことが叶わなかった同胞の方々の、深い無念が胸に迫ってまいります。そして同様に、この戦闘によつて尊い命と平穏な日常を奪われた数多くのフィリピン人の方々、日系人の方々、そしてその御家族が担われた筆舌に尽くし難い苦悩と悲しみを、我々日本人は永く心に刻み、決して忘れてはならないと感じます。ここに、全ての戦没者の方々の御霊（みたま）に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

今なおこのフィリピンの地に眠られたまま、故郷への帰還を果たされていない多くの御遺骨もございます。その存在を片時も忘れることなく、一

柱（ひとはしら）でも多くの御遺骨を一日も早くふるさとへお迎えすることとは、国として果たすべき揺るぎない責務です。その使命を全うするべく、今後も不断の努力を重ねてまいります。

かつての戦争が残した深い傷を、忘れず、しかし乗り越えるべく、日比両国は、互いの絆を着実に育ててきました。

国交正常化70周年という節目を迎えた本年、マルコス大統領を国賓としてお迎えし、日比関係は、「包括的・戦略的パートナーシップ」に格上げされました。経済、安全保障、社会、文化と多岐にわたる分野で協力の裾野を広げる日比関係は、新たな時代へ向け、更なる可能性を秘めています。戦禍を越えて深い友好協力関係を築くことができていることを、戦没者の

方々の御霊（みたま）に、心を込めて御報告申し上げます。

今もなお、ロシアによるウクライナ侵略、米国とイランの戦闘など世界では緊張が続いています。我が国を取り巻く安全保障環境は、戦後最も厳しく、複雑な状況にあります。このような時であるからこそ、81年の歳月が経った現在、改めて戦争の悲惨さと平和の尊さを深く心に刻み、その記憶を風化させることなく次の世代へ継承していくことが、一層重要です。

戦後、日本は世界の中で平和を重んじる国として、名誉ある地位を築いて参りました。それは日本が世界に誇る歴史であり、歩みです。戦争の惨禍を二度と繰り返さないとの決然たる誓いを貫き、万人が心豊かに暮らせる世界の実現を目指してきたその歩みを、ここに改めて確認し、日比両国

が共にその先頭に立つことを、戦没者の方々の御霊にお誓い申し上げます。
尊い命を捧げられ、祖国の礎となられた幾多の方々の御冥福を改めてお祈りするとともに、御遺族の皆様、参列者の皆様、在留邦人の皆様の平安、並びに日比両国間の一層の友好親善を祈念し、慰霊祭の閉会の辞といたします。

令和八年八月十五日

駐フィリピン日本国大使

遠藤 和也